

作文部門

☆総評☆

今年は、特別なことではなく、身の回りのことを題材にして書かれた作品が多く寄せられました。また、書きたいことの中からよいものを書こうとして題材を選んだり、題名を工夫したりすることもよくできていて、うれしく思います。

全体の構成を考えただうえで、自分の目でとらえた動きや気持ちの変化を書き加えて、原稿用紙五枚を有効に使うようにすると、もっとよい作文になるでしょう。

文部大臣奨励賞

「ワーキングウーマン」

愛知県愛知教育大学附属岡崎小学校

四年 桑木 哲平



ぼくたち家族は、今年、三月の末に、今住んでいる梅園の家に引っ越してきた。以前は、おばあさんや富士子おばさんも一緒だったが、弟が小学校に入学するのを機に、お父さん、お母さん、弟、それにぼくの四人だけの生活が始まったのだ。

建てたばかりの家のくらしは、家が変わったというだけでなく、以前と、いろいろなことが変わった。そのうちの一つは、お母さんが勤めに出るようになったことだ。以前は、弟が、幼稚園児ということもあって、専業主婦だったのに、何を思っただうか、お母さんが、ワーキングウー

マン宣言をしたのだ。あ然とする、お父さんやぼくたちを尻目に、お母さんは、元氣よく、働きに行ってしまった。煙に巻かれたように、残されたのは、ぼくたち男三人で、お母さんは、以前にも増して元氣になったように見えた。

が、しばらくすると、ちよつと様子が変わった。あの元氣なお母さんが、つかれた顔をして、リクライニングのイスで、ぐったりしていたり、新しく引っ越してきたばかりだというのに、家の中が雑然としていることが、多くなったのだ。つち色にも似たお母さんの顔色は、ぼくが見ただけでも、とてもつかれているのがわかり、ぼくは、

「ああ、これでお母さんのワーキング生活も終わりだ。」と思った。後で聞いた話だが、お父さんも、その時、ぼくと同じ考えだったようだ。第一、今までずーと専業主婦だったのが、突然働きに行くなんて、土台無理な話ではないのか。家の中のお母さんは、洗たくをしたり、食事のしたくをしたり、ぼくたちの学校参観を見に来たり、とても、外で働く女の人と結びつかない。テレビで女の人が、さっそうと働くすがたを、カッコイイと思っただこともあるけれど、でも、ぼくのお母さんとはちがう気がしていた。

ところが、いつまでたってもお母さんは、

「もう働くのやめた。」

と、言わないのだ。つかれて帰ってググツとねていても、家の中が、グチャグチャになっただうても、

「もうやめた。」

とは言わないのだ。お父さんや、ぼくたちが、

「もうやめたら？」

といっただうも、やめないお母さん。どうして、そんなにがんばるのか、ぼくにはとても、わからなかった。

そうこうして間、お母さんだけでなく、お父さん

も、以前と少しずつ変わってきた。おばあさんと一緒に住んでいた時は、お父さんが、

「新聞」

といえ、お母さんがもってきたし、

「ワイシャツ」

「ハンカチ」

って言えばワイシャツやハンカチをもってくるのは、お母さんだ。でも、今、新聞やワイシャツ、ハンカチをもってくるのは、お父さん自身だ。最近では、お父さんが、洗たく物をほしたり、お皿を洗ったり、もう、おばあさんといっしょにくらしていた時は、考えられないことばかりだ。家族のパンツをほしたり、台所で、お皿を洗っているお父さんのうしろすがたは、とてもカッコイイとはいえないけれど、でも、ぼくと一緒に剣道をしているお父さん同様クライではない。ぼくや弟も自分たちの食べた後の、おちゃわんやお皿を、かたづけたり、順番を決めて、家中のゴミ集めをしたり、おふろ洗いを手伝ったり、いつの間にか、お父さんやお母さんを手つだうううになった。なんだか、お母さんの思っただうりになっただう、お母さんは、

「今は、能力さえあれば、女の人も男のと同じ様に働くことのできる世の中。男の人は、それを助けなくっちゃね。」

と、少々自分に都合よいことを言っただう、お父さんや、ぼくたちを、主夫にしようと思え、しているようだ。でも、今では、ぼくも、女の人が男の人と同等に働くのは、よいことだと思っただうし、能力がある人が、家の中にいて、働くことができないのは、残念なことだと思えるようになってきた。

今、ぼくのうちでは、手がすいてひまな人が、家事をする。それが、お母さんだったり、お父さんだったり、二人の主婦と主夫が家事をする。

読書感想文部門

☆総評☆

特に上位入賞した作品では、本そのものを深く読みこんだ上での感想と、それを自分の生活に当てはめての意見とが、バランスよく書かれているものが多く、構成のうまさが目を見ました。ただ、逆にあらすじばかりで、読書感想文の基本的な書き方がつかめていないものが、小学校低学年の作品に目立ったのが残念です。

文部大臣奨励賞

「夏の庭を読んで」

千葉県千葉大学教育学部附属小学校

五年 角野 愛



死ぬってどういう事だろう。この本の主人公と同じ問題を私は考えこんでしまった。

主人公の『ぼく』には、二人の親友がいる。その一人、山下君が長い間会った事もなくおばあさんのお葬式に行っただう。そして学校に出て来て言う。「死んだ人って重たそうだった。」その言葉に、もう一人の親友河辺君が反応した。「オレたちも死んだ人が見たい！」こうして三人は近所に住む一人暮らしのおじいさんに目ぼしをつけ、おじいさんが死なななな、毎日見張る事になった。最初はただただいくつだった。おじいさんの暮らしも荒れていて、本当に今にも死んでしまっただうような老人に見えた。その内この三人とおじいさんは知り合っただう、うちとけ合っ

家に訪ねて行くようになる。すると、おじいさんの暮らしぶりが見る見る変わってきた。活き活きとして来たのだ。三人の手によってきたなかつた家の周りも庭もサツパリとかつたづき、洗たく物が干され、コスモスの種までまかれた。何よりも一番変わったのは、三人のおじいさんに対する思っただう。これまで、おじいさんの死を待っているだけだったのに、知り合っただうにつれ、おじいさんの『生』の部分にひかれて行く。昔の話や戦争の体験を聞き、いろんな手伝いをして生活の知恵をさずかる。自分たちの将来の話をした。三人はおじいさんの『死』よりも『生』により強く興味を持ったのだと思っただう。私は、ずっと前から思っただう事がある。それは（お年寄りの顔ってみんなどこか似ていて、そして全然ちがう。すごく味わいがあるなあ。）という事だ。多分それは生きてきた長さのせいじやないかなと思っただう。主人公の『ぼく』はおじいさんを見て思っただう。（もしかしら歳をとるのは楽しいことなのかもしれない。歳をとればとるほど思っただうはふえるはずなのだから。そしていつかその持ち主があとかたもなく消えてしまっただうも、思っただうは空気の中を漂い、雨に溶け、土に染みこんで生き続けるとしたら、いろいろなところを漂いながらまた別のだれかの心にちよつとしたのびこんでみたりするかもしれない。）私もそう思っただう。歳をとるという事は、『死』に向かつて進んでいく事ではななな、『生』を積み重ねていく事だと思っただう。生きていくという事は、息を止まるという事だけではなななし、死ぬという事は、息が止まるという事だけではなななし、死ななな、後に残った人たちに大切な事を残していく。どういふうに死ぬかつた事よりも、どういふうに生きるかつた事がうんと大切なんだと思っただう。

そしてもう一つこの本を読んで心に残ったことがある。三人の少年たちは、最初おじいさんの死を興味だけで見

優秀賞

「やさしい作り」

愛知県豊橋市立大村小学校二年 内藤美保

夏休みにおうちの仕事の手伝いをしたときのことを、よく見て書いています。「あせがポタポタとはこのすみにおちます。」など、みんなが一生懸命に働く様子や、なすに傷がつかないよう「赤ちゃんをだつこするよう」に丁寧に仕事をする姿が、生き生きと描かれています。

「山寺はきつー！」

東京都目黒区立黒星美術小学校四年 中村水菜美

激しい暑さの中、一時間近くかかって千段以上もある階段を上つて山寺へ行ったときのことを中心に書いています。ほとんど休まずがんばつて歩いたり、休けい所で「力こんにやく」をおいしそうにほおばつたりする姿や、松尾芭蕉も俳句に読んだという景色が目につかふようです。

「家族の一員」

愛知県岡崎市立三島小学校六年 倉橋佳代

書き出しの部分で読み手が引きつけられます。また、淡々と書く中に、集中治療室とそこに寝ている弟の様子、自分の気持ちがよく表れています。入院している弟の痛々しい姿を見て、自分も家族の一員として役割を果たさなければと思っただう、進んで手伝いをする佳代さんの成長がうかがえる作品です。

ていたのに、最後におじいさんがあつけなく亡くなってしまった時にはとても悲しみ、残念がり、『忘れられない思い出』としてその死を心に刻みこむ。三人の心の中でおじいさんの死の意味がどういうふうに変わったのだろう。

私のおじいちゃんは、私が三才の時に死んでしまった。私はその事をほとんど覚えていない。周りの人たちがみんなワーワー泣いている中で、お棺の中のおじいちゃんだけが、シンと静かだった事。そのおじいちゃんの顔を見ているとなぜか泣きだくなって、ビービー泣きながらお母さんに飛びついた事。とても暑い夏の日だった事。それだけを覚えていて。もしこの『ぼく』たちのようにおじいちゃんの生の部分とともつと接していたら、私があと少し大きくて、おじいちゃんといっしょに暮らしていたら……私はおじいちゃんの死をもっと強く心に残したにちがいない。それはきっと、おじいちゃんの生きていた頃の思い出の分量と同じという事なのだろう。

私はこれからの人生でたくさんの人たちと出会うだろう。その人たちに思い出を残し、私も自分の中に思い出を作ろう。生き方をして行きたいと思う。人と人とのつながりを大切に考えて、出会いや別れを大事にしたと思う。

最初この本を読み始めた時、うれしい話も出て来たし、一人暮らしの老人が死んでくさって行く話も出て来たので、こわいなあと思っていたけれど、読み終わってみると、生きる事の意味、人と人との心のつながりといった大切な事を教えてくれたように思う。

主人公たち三人は、おじいさんの『生と死』にふれた事で自分たちの将来に向かって大きな一歩をふみ出した。私もこの本から学んだ事を心に刻んで、自分の道を一生懸命生きていきたいなあと何度も思った。

この本は、今年の夏の大切な思い出だ。

おじいさんに対する少年たちの気持ちの変化と、それに伴っての、愛さんの『生と死』についての考え方の深まりが、素直な言葉で表現されています。

「生きているという事は、息をしているという事だけではないし、死ぬという事は、息が止まるという事だけでは絶対じゃない。」

という言葉に、表面だけに止まらない、深い読み取りがうかがえます。

また、自分のおじいさんのことに触れることで、単に「本の感想」に終わらない作品に仕上がりました。

「死ぬってどういう事だろう。」と始まる書き出しにも、読み手を引きつける工夫がされていて、愛さんの文章力がうかがえます。

優秀賞

「まあちゃん」を読んで

東京都星美学園小三年 神保祥子

「まあちゃん」だけでなく、耳の聞こえない妹をもち、苦しむ「かよちゃん」の心の動きもよくとらえて書かれています。本当に大切なのは「心の耳」であり「心の目」であるという作品のテーマをしっかりとかみ、自分の問題として考えを深められているところが、高く評価されました。

二人へのエールで結んでいるところも、とても印象的です。

「大切なものを求めて 『野の天文学者 前原寅吉』を読んで」

青森県八戸聖ウルスラ学院小五年 森田美奈子

郷土の偉人である「前原寅吉」という人物の再発見と、その生き方に触れての驚きと感動が、飾らない言葉で表現されています。寅吉が単なる天文学者ではなく、「望遠鏡の向こうに人の命を見ている」というところまで読みを深めていたことで、文章全体の重みが増しました。ただ、美奈子さん自身の生き方の問題に発展させた意見が少なかったのが残念です。

「孤独な少年時代の作者に想う」

愛知県愛知教育大学附属岡崎中二年 中島直美

室生屋星の、孤独で繊細な性格の基礎を形作ったものに、幼年時代の体験と、それに基づいた「母恋いの想い」という観点からよく追って書かれています。全体を通しての構成も巧みで、一か所引用されている屋星自身の言葉も効果的です。

ただ「本そのものの読み取り」から外へ出られなかったことが残念な気がします。

その他の受賞作品 作文部門

◆優良賞 「ひのはらむらキャンパのおもいで」（目黒星美学園小一年 松本 允 「十一才の誕生日——出発の時」（新潟大学教育学部附属新潟小五年）本間洋州 「私の考える国際理解」（前橋市立芳賀中一年）林友里 「私はほつべの赤い女の子」（久瀬村立久瀬中二年）増元さおり 「初めての保母さん体験」（碧南市立中央中三年）古沢由希子

◆佳作 「やねの上のくつ」（愛知教育大学附属岡崎小一年 林大地 「六年生とドッジボールをしたこと」（岐阜市立七郷小三年）上坪宏史 「わたしが育てた小さないのち」（大垣市立中川小三年）清水理絵 「ぼくはまけない」（呉市立長迫小三年）大山博之 「雪の夜のこころ」（萩光塩学院小四年）市原彩 「心は同じ」（八戸市立旭ヶ丘小五年）藤井尊典 「赤ちゃんが生まれた」（愛知教育大学附属岡崎小五年）山本幸平 「ぼつば」（安達町立下川崎小六年）野地敦子 「ブラックバス釣り」（愛知教育大学附属岡崎小六年）板倉聖能 「おそろしい阪神大震災」（百合学院小六年）林加奈子

読書感想文部門

◆優良賞 「ベトちゃんドクちゃんからのてがみ」を読んで（土佐市立高岡第一小二年）森沢雅美 「ちいさないのちのおくりもの」（星美学園小三年）鎌倉志保 「がんばれ！盲導犬サーフ」を読んで（真正町立真桑小三年）福田潤 「飛べ！千羽鶴」を読んで（組合立境川中二年）堀江真実 「生きる」（大阪教育大学教育学部附属天王寺中三年）尾島有美

◆佳作 「かわいそうなぞう」を読んで（愛知教育大学附属岡崎小一年）仲山沙織 「白旗の少女」を読んで（大阪教育大学附属天王寺小二年）小畑有以 「やぶかのはなし」を読んで（大阪教育大学教育学部附属天王寺小二年）中野嘉之 「サッコがいく」を読んで（大田市立九合小四年）山本恭子 「サッコがいく」を読んで（市川市立中山小四年）木浦有希 「二五郎は天使のはねをつけた」を読んで（松本市立開明小四年）森田薫 「北国の愛の物語」（愛知教育大学附属岡崎小五年）小野塚彩 「にーんちゃん」を読んで（星美学園小六年）里見麻衣 「共に生きたい」（愛徳学園小六年）山原有加 「母の大切さ」（大阪教育大学教育学部附属天王寺中一年）山元瑠理